西南戦争は「明治維新」誕生の最後の段階いわゆる後産（あとざん）の悩みだといわれる。それまで引続く内乱に狂奔した新政府も、ここにようやく一応の政治的改幕を迎えて、明治新政再出発のスタートを切ったのである。

郷土熊本も、九年の神風連に加えて二度の手痛い試練を受け、いよいよ否応なしに封建の夢から呼びさまされたが、同時に今度は、民権時代の烈しい潮流の中で、保守、改新両派の死闘に突入する。保守陣営に屯ろするものは勿論学校党の一連であり、革新思想を温和するものはこれまたいうまでもなく実学党のグループであった。

これら両党は、それぞれ自党の勢力を扶植することを主目的として、教育機関の設立に着手した。当時県政の主軸であった実学党は、新しい教育令に基いて県立中学校の設立にふみきった。その草分けは明治九年開校の千葉中学校（千葉城跡）であるが、これが西南役に焼失したので十二年新たに熊本中学校が発足した。熊本では最初の近代的施設をもち、その教科も西欧風な色彩が濃厚であったことは当然であろう。ところがいよいよ開校となると、生徒は実学連の子弟ばかりで、学校党の父兄は子弟の入学をがえんじない。洋式の新教育に対する不満もさることながら、単に実学党の建てた学校に入れることを潔しとしないという感情が先走っていたのも争えない。

当時実学党は改進党、学校党は紫溟会と称して純然たる政党となっていたが、紫溟会の領袖佐々友房は、同志と組んで改進党に対抗するため同心学舎という塾を設けた。

その設立趣旨なるものを見ると、

「天下の人心は漸く泰西新歩の思想に衝動せられ、動もすれば空想の説、詭激の論滔々として一世の風潮を成さんとし、時に或は図体論理の何物たるを弁えざる者あるに至れり」云々。

と述べており、明らかに県立中学の教育を仮装敵国としていることが分る。

明治十五年一月、同心学舎は済々黌と名を改め、第二段の活動に入った。今日の県立済々黌高等学校がその後身であることは説くまでもあるまい。ここの教育方針として佐々友房が自ら起草したといわれる三綱領は、今日もなお伝統されて命脈を存している。

一、倫理を正し、大義を明らかにす。
一、廉恥を重んじ、元気を振う。
一、知識を磨き、文明を進む。

というのがそれである。

「皇室の干城、国家の柱石」を養成するという目的を掲げているだけに、その教科は皇漢学、数学、物理、法律、文章、撃剣となっており、外国語のないのが目立つ。しかし、流石に十八年九月の改正では、学科の中にドイツ語学、英語学、支那語学等を加え、その他の科目も充実して、県立中学との均衡を計っているのは、時勢の潮流に抗しかねたものとも見ることが出来よう。ややさかのぼって明治十六年、朝廷から特別のご下賜金を頂いたことも、済々黌に歴史と貫禄を添えた。

こうした紫溟会の教育攻勢に対して、改進党側も黙って見ていた訳ではない。明治十一年創立の広取学校、十二年開校の共立学舎、十五年開塾の大江義塾等は皆その実例であるが、いずれも三、四年の命脈であった。徳富蘇峯の大江義塾と済々黌が、しばしば生徒間の紛争を起した逸話などによっても、両党の軋轢はうかがうことができよう。それはまた洋学校以来の欧化的自由民主思想に対する、時習館流の儒教的保守主義の抗争でもあった。

こうして逆に明治二十一年三月、県立熊本中学校の廃止という破局が到来する。県政が紫溟会の牛耳るところとなったからである。

ともあれ、政争の弊が嵩じて子弟の教育をまで累するに至ったことは、政争県といわれたかっての熊本を象徴する最も顕著な具体例といえるのであるが、後年に至ってもこの弊風はあらゆる社会現象に大なり小なりいろいろな形で露呈された。これを教育の面のみに限っても、教員の任免には政党色が露骨に現れ、教師としての実績よりも政党とのつながりや、これへの影響力の大小が、昇進や左遷の条件とされた。教師自身に党色がなくても、その家や係累の所属する党派によって、時には報復の犠牲とされ、時には恩賞の椅子が与えられたのだから驚く。勢いこの風潮を利用して立身出世を計ろうとする似非教育者の輩出も止むを得なかったのである。

（郷土雑誌「呼ぶ」主宰）

くまもとの明治百年

政争が歪（ゆが）めた教育

（その4）

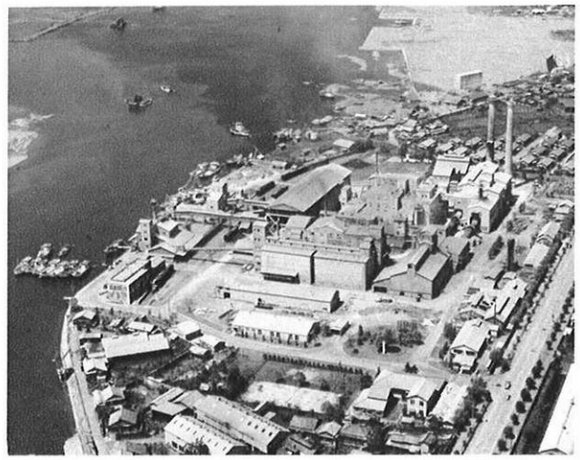
山口白陽

くまもとカメラスケッチ

港（その1）—八代港—

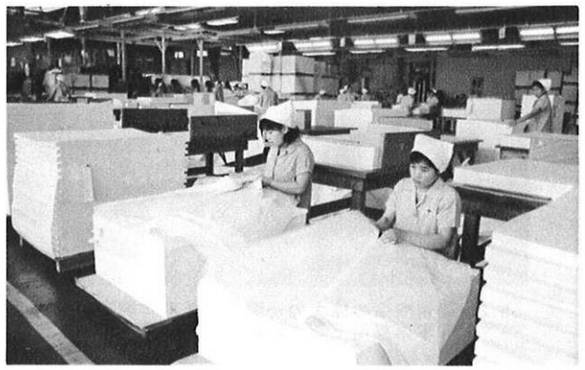
いうまでもなく八代市は球磨川の河口デルタ地帯に発展した南九州随一の工業都市。豊かな水と広大な埋立地を持ち大工場が建ち並ぶこの臨海工業の拠点を背景に、八代港の果す役割は大きい。
昭和34年に重要港湾の指定、43年4月には貿易港の開発指定になり、貿易工業港としての比重はますます高まってきている。すでに1万トン岸壁も完成し、さらに44年度までに1万5000トン岸壁2バースが完成する見込みである。

上・大型化していく八代外港



上・八代地区は四大工場を中心に県下でも熊本市につぐ工業集積をもっており、工業出荷額は全県の20%をしめている。

上と下・港を背景に製紙・セメント・人絹などの工業がさかん。



下・内港地区は商港として、観光旅客輸送の基地としても特色をもっている。